



WALD NEWSLETTER



人と環境に優しい木造住宅
株式会社ヴァルト
Tel.026(268)4355

建物の劣化を防ぐ決め手
Breathability.
呼気性能「フレザビリティ」

〒381-0022 長野市大豆島 5215-1(大豆島展示場)
<https://wald-inc.jp/> 長野ヴァルト 検索



2025年6月イベントのお知らせ

風に初夏の香りが混じる頃となりました。日差しが強くなる日も増え、爽やかで心地よい場所が恋しくなりますね。

さて、そんな季節にぴったりのイベントを企画いたしました。送風のある冷房とは異なる涼やかな空気に満たされる弊社の展示場の、身体に優しい快適な空間をぜひご体感ください。

2025年6月の催し

新築住宅完成見学会

会場：千曲市 屋代
期日：令和7年6月15日(日)【予約制】
時間：10:00～16:00

夏の八幡屋礪五郎を創り食す会

会場：大豆島常設展示場
期日：令和7年6月28日(土)【先着10名様 予約制】
時間：10時受付開始～10時半開始(13時頃終了予定)

冷房環境体験ツアー(展示場冷房体感 & 稲葉の家冷房体感)

期日：令和7年6月1～30日(火曜・水曜を除く)【予約制】
時間：10:00～17:00

家づくり勉強会 会場：大豆島常設展示場

期日：令和7年6月7・14・21・28日(土) 【予約制】
時間：AM10:00～, PM13:00～

ローン相談会 会場：大豆島常設展示場

期日：令和7年6月5・12・19・26日(木) 【予約制】
時間：13:00～(1時間程度)
講師：ライフプランナー 柳澤氏

026-268-4355

ご予約お問い合わせは ▶ WEB <https://wald-inc.jp/>

✉ info@wald-inc.jp

■ 新築住宅完成見学会

新築住宅完成見学会のお知らせです。この住宅は、太陽光発電システムと蓄電池を搭載し、環境への配慮と経済性を両立するGX(グリーン・トランスポーテーション)志向型住宅の申請中の高性能なお宅です。

GX志向型住宅とは、地球環境に優しい持続可能な社会の実現を目指し、省エネルギー性能の向上や再生可能エネルギーの活用などを通じて、CO2排出量の削減に貢献する住宅のことです。ご予約いただきましたら、現地案内情報などをお知らせいたします。どうぞお気軽にお問い合わせください。



■ 「夏の八幡屋礪五郎を創り食す会

善光寺門前の老舗「八幡屋礪五郎」様との共同企画として、特別な食のイベント「夏の八幡屋礪五郎を創り食す会」を催す運びとなりましたのでご案内いたします。

八幡屋礪五郎の職人、金井氏を講師にお迎えし、皆様だけのオリジナル七味を調合していただきます。完成した七味はドイツ風オードブルと共に試食会でお楽しみいただけます。

厳しい夏の暑さを快適に過ごす住まいの提案として、当社の大豆島常設展示場を会場といたします。エアコンを使わない快適な空間をご体感いただきながら、信州の食文化に触れる特別なひとときをお過ごしください。この機会を通じて、皆様の暮らしがより豊かになる住まいづくりのヒントをお届けできれば幸いです。

イベント名：夏の八幡屋礪五郎を創り食す会

開催日時：6月28日(土)午前10時受付開始

10時30分開始(午後1時頃終了予定)

場所：Wald 大豆島常設展示場

内容：八幡屋礪五郎の職人による七味の基本レクチャー

オリジナル七味のブレンド体験

完成した七味はドイツ風オードブルと共に試食会でお楽しみいただけます。

会費：1,000円

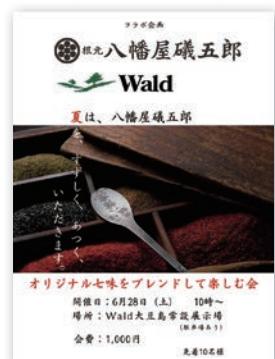
定員：先着10名様

お申込み方法：お電話またはメールにてお申し込みください。

株式会社ヴァルト TEL: 026-268-4355

メール：info@wald-inc.jp

八幡屋礪五郎 TEL: 026-232-3966(担当：金井・清水)



■ 冷房環境体験ツアー(展示場冷房体感 & 稲葉の家冷房体感)

常設展示場 & OB様のお宅、夏の特別冷房体験ツアーです。

夏の住まいの快適さは、エアコンの性能だけで決まるものではありません。弊社がご提案するのは、送風によって体を冷やすのではなく、建物全体で涼やかさを生み出す先進の冷房システムです。それは、まるで静かな洞窟の中にいるような、上質な室内環境です。

この度、その心地よさを深くご体感いただくため、特別な体験ツアーを企画いたしました。本ツアーでは、弊社の技術の粹を集めた「大豆島常設展示場」に加え、実際に2年間お住まいになっている「OB様のお宅」を特別に巡ります。

モデルハウスで理想の環境を知り、リアルな住まいの中でその価値を実感する。このまたとない機会に、健康的で快適な「未来の夏の暮らし」を先取りしてみませんか。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。

■ 家づくり勉強会【大豆島展示場】

少人数の対話型勉強会です。弊社の住まいづくりの特徴や一般的な住まいづくりに関する疑問、様々な選択肢に対する考え方など、皆様の個々の質問や相談にお答えしてまいります。展示場の室内環境も併せて体感していただけます。お気軽にお出かけください。

■ ローン相談会【大豆島展示場】

生涯で最も高額な買い物、多くの方がローンを利用されますが、金利のことから、返済計画など総合的に無料でご相談頂けます。将来を見据えたローン計画、しっかり試算してみましょう。

新しい家づくりの常識

いよいよ今年4月から、日本の家づくりに新しいルールがスタートしました。それが「省エネ基準の義務化」です。

「難しそう…」と感じるかもしれません、これは皆様がこれから建てるお家で、より快適に、健康に、そして経済的に暮らすための素晴らしいルールです。今回は、この新しい常識について解説します。

そもそも「省エネ基準の義務化」って何?一言でいうと、「これからの新築住宅は、国が定めた断熱性能などの省エネ基準をクリアしなければ建てられません」ということです。

これまで努力目標でしたが、これからは法律で定められた必須項目になりました。

なぜ義務化されたのでしょうか?それは、断熱性の高い家がもたらす多くのメリットがあるからです。

- ・年中快適な室温: 夏は涼しく、冬は暖かい。魔法瓶のような家。
- ・光熱費の節約: 冷暖房の効率が格段にアップし、お財布に優しい。
- ・健康的な暮らし: 部屋間の温度差が減り、ヒートショックのリスクを軽減。結露も防ぎカビ・ダニの発生を抑えます。

つまり、省エネ性能は、未来の暮らしの「快適さ」と「安心」を支える土台そのものなのです。

家の性能は「省エネ等級」で分かれます。あなたの家はどのレベル?では、その性能はどうやって見分けるのでしょうか?

家の断熱性能は「断熱等性能等級」という指標で示されます。等級の数字が大きいほど、性能が高いことを意味します。そして、今回の義務化で「等級4」がすべての新築住宅の最低基準となりました。

下の表を見てください。この「等級」の階段を上るほど、より快適で省エネな暮らしを実現できます。

断熱仕様（省エネ等級）

等級	基準	UA値(4地域)	ヴァルトのポジショニング
パッシブハウス相当	≈0.20	ヴァルトの大豆島展示場	
等級7 HEAT20 G3相当	0.23	ヴァルトのNearly/パッシブハウス仕様	
等級6 HEAT20 G2相当	0.33	ヴァルトの標準仕様はここ!	
等級5 ZEH外皮水準相当	0.60		
等級4 国の省エネ基準	0.75	【2025年からの義務化ライン】	
等級3以下	1.25以下	今後は新築で建てることはできません	

ヴァルトの家づくりは「国の基準」の、ずっと先を見ています。上の表でお分かりの通り、国が定めた義務化ラインは「等級4」です。しかし、私たちが本当に快適で、健康な暮らしをご提案するためには、この基準はスタートラインに過ぎないと考えています。そのためヴァルトの家づくりは、「等級6」を標準仕様としています。これは、国との新しい基準よりも2段階も高性能なレベルです。

国の基準（等級4）: UA値 0.75、ヴァルトの標準仕様（等級6）: UA値 0.33、と国の基準の半分以下の熱損失しかありません。それは、冬の暖房の熱が逃げにくく、夏の冷房の涼しさも保ちやすい、非常に燃費の良い家であることを示しています。

■ これからの家づくりで、一番に考えてほしいこと

デザインや間取りはもちろん大切です。ですがそれと同じくらい「家の性能（特に断熱等級）」にもぜひ注目してください。この性能は、後から簡単には変えられません。

ヴァルトは、お客様一人ひとりのライフスタイルやご予算に合わせて、最適な性能プランをご提案します。「等級6」を標準としながらも、さらに上を目指す「等級7」や「パッシブハウス」仕様まで、幅広い高性能住宅建築の実績とノウハウがあります。

新しい時代の家づくり、ご不明な点やご興味があることは、どんなことでもお気軽にご相談ください。

未来の家族の笑顔と快適な毎日のために、最高の家づくりと一緒に考えましょう。

地球の温暖化

地球温暖化について多くの議論が交わされるなか、いまだに「地球は温暖化していない」「温暖化していても人間のせいではない」といった、「温暖化懐疑論」が根強く噂されている。温暖化は本当か、またそれは人間のせいなのだろうか。

『エコハウスのウソ2』発行日: 2020年8月24日第1版、著者: 前真之、発行: 日経BP この本の記事を引用し紹介します。

前 真之 (まえ まさゆき) 氏: 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻准教授。博士 (工学)。98年東京大学工学部建築学科卒業。2003年東京大学大学院博士課程修了、建築研究所などを経て、04年10月に東京大学大学院工業系研究科客室助教授に就任。2008年から現職。専門分野は建築環境工学で住宅のエネルギー消費全般を研究。健康・快適な生活を太陽エネルギーで実現するエコハウスの実現と普及のための要素技術・設計手法の開発に取り組んでいる。

■ 世界の結論は「温暖化は疑う余地なし」

図1 “地球温暖化は人間が原因”が世界のファイナルアンサー

気候変動に関する政府間パネル (IPCC) においては、世界中の専門家が温暖化の進捗調査 (WGI) と影響予測 (WGII)、その緩和策 (WGIII) を議論している。2007年の第4次報告書で地球が温暖化していることを確定。13年の第5次報告書でその主因は人間が排出する温室効果ガスであると確認された。この結果を踏まえて具体的なCO₂削減目標を設定したのがパリ協定である。

1990年	第1次報告書	「CO ₂ などの温室効果ガスが地球の気候を変化させる可能性がある」
1995年	第2次報告書	「人類の活動により地球の気候が人類の歴史において前例がないほど変化すると予想される」
1997年	京都議定書	先進国を中心にCO ₂ 削減目標を設定 (日本は2010年までに1990年比6%削減が目標)
2001年	第3次報告書	「過去50年の温暖化の大部分は、人類の活動が原因とする新しい強力な証拠が存在する」
2007年	第4次報告書	「温暖化には疑う余地なく (unequivocal)、1950年以降の温暖化は人類起源の温室効果ガスの増加による可能性が非常に高い (very likely 90%以上の可能性)」
2007年12月	IPCCがノーベル平和賞を受賞	
2013年	第5次報告書	「温暖化には疑う余地なく、人類活動による可能性が極めて高い (extremely likely 95%以上の可能性)」
2015年	パリ協定	「温度上昇を2°C以内、できるだけ1.5°C以内に抑えるために、2050年までにCO ₂ 排出量ゼロを目指して各国が努力することに」

IPCC 第5次報告書の要旨

- 1850 ~ 1900年の期間に比べて2006 ~ 15年の10年間は、0.87°C程度温度が上昇している
- 人間活動による地球温暖化は10年で約0.2°C進んでいる
- このまま温度上昇が進むと2030年~52年の間に温度上昇が1.5°Cを超え、地球環境に大きな影響が出る
- 温度上昇を1.5°C以内に抑えるためには、2050年までにCO₂排出量をゼロにする必要がある

「人間が原因」国際連合の「気候変動に関する政府間パネル」、通称IPCCは、1990年から地球温暖化について各国の専門家による調査研究を続けている図1。世界中の研究者が地球の温度予測について真剣

な議論を積み上げた結果、既に2007年の第4次報告書において「温暖化は疑う余地がない」と結論付けている。

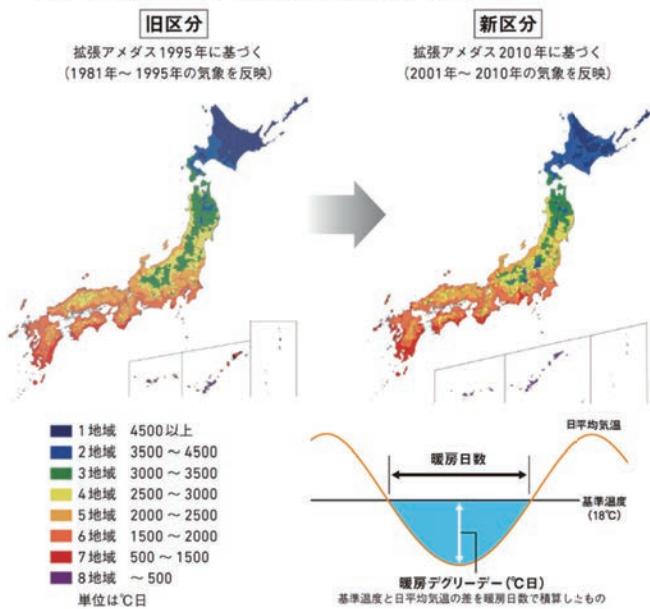
さらに13年度の第5次報告書において、「温暖化は人間活動起源の温室効果ガス排出などによる可能性が極めて高い」と明確に示した。長い時間をかけた世界中の専門家の調査研究と議論を通じ、世界の「ファイナルアンサー」は既に出ていていることを忘れてはならない。

■ 建築物省エネ法「地域区分見直し」の衝撃

国連の結論は、あくまでも世界規模の話でしょう?と、他人ごとに思う人も多いだろう。だが日本の気象データにおいても、温暖化の影響はくっきり表れている。最近話題になったのが、「地域区分の見直し」。「建築物省エネ法」においては、日本を冬の寒さに応じて8つの「地域区分」に分けて、それぞれ達成すべき省エネ性能を定めている。この1地域から8地域までの8区分の根拠は「暖房デグリーダー」。基準温度(通常18°C)以下となる気温の差分を積算した値で、「冬の気温の低さ」を示す指標として広く用いられている。

図2 建築物省エネ法の地域区分も見直し

冬の気温の低さを表す「暖房デグリーダー」に基づく地域区分は2019年11月、気象データが最新のものに差し替えられ、多くの地点がより温暖な地域区分にシフトした



この地域区分が19年11月、気象データ更新と市町村合併対応のために見直された図2。その結果、以前より温暖な地域区分に変更された市町村が続出図3。温暖化の影響を、改めてさまざまと感じさせる結果となつた。

図3 仙台市が4地域から5地域に変更

旧→新区分	地点名
1地域 → 2地域	旭川市 鎧路市 帯広市 北見市 網走市 権内市 紋別市 ニセコ町
2地域 → 3地域	十和田市 室蘭市
3地域 → 4地域	宮古市 北上市 米沢市 日光市 富士吉田市 松本市 高山市
4地域 → 5地域	仙台市 鶴岡市 福島市 長岡市 飯田市
5地域 → 6地域	前橋市 足利市 さいたま市 町田市 八王子市 福井市 甲府市 奈良市
6地域 → 7地域	館山市 横須賀市 藤沢市 静岡市 沼津市 和歌山市 松山市 熊本市 大分市
7地域 → 8地域	小笠原村 奄美市

地域区分の見直しの結果、より温暖な地域に区分が変更になる地点が続出した。特に、厳寒地の代表であった旭川市が1地域から2地域に、準寒冷地の代表であった仙台が4地域から5地域に変更されたことは、温暖化の進行を強く印象付けた

(出典:国土交通省の地域区分旧表、2019年11月版)

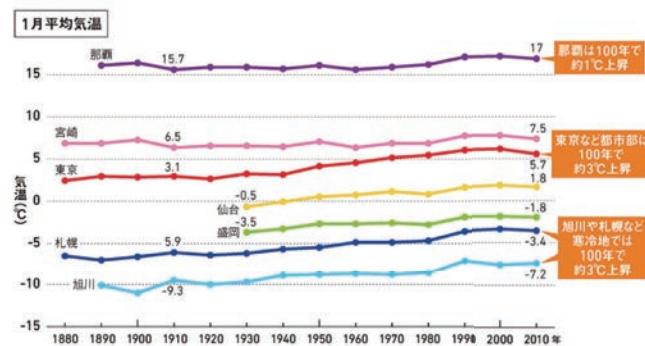
■ 冬の寒さは和らいできている

実際の気温はどうなっているだろうか。日本では1875年(明治8年)ごろから継続的に、温度などの気象データが各地で計測・記録されている。先人が残してくれた、この貴重なデータを分析してみると、年間で気温が最も低い1月の平均気温は、都市部や寒冷地ではこの100年で

約3°Cも上昇していることが分かった図4

図4 1月の平均気温も間違なく上昇している

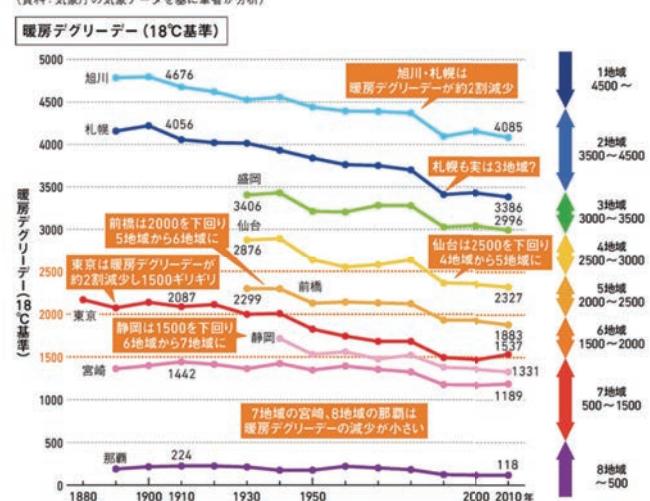
年間で気温が最も低い1月の平均気温の推移。特に都市部や寒冷地での温度上昇が激しい
(資料:気象庁の気象データを基に筆者が分析)



気温の上昇に伴って暖房デグリーダーも急激に減少しており、寒冷地や都市部ではおよそ2割減図5。仙台や前橋、静岡では、地域区分の境界である2500、2000、1500°C日の値を切ってきており、区分が見直されたのも当然といえる。

図5 冬の寒さ指標「暖房デグリーダー」も急減少

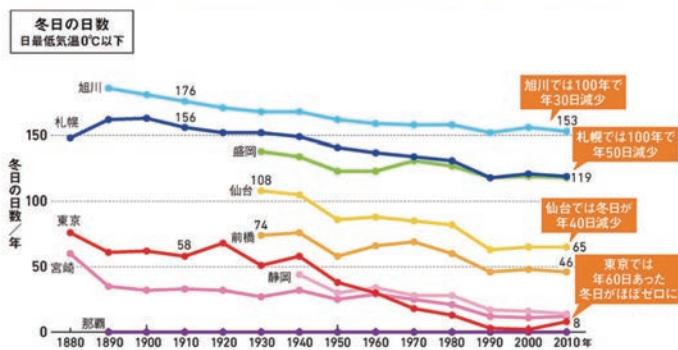
暖房デグリーダーは冬の気温の低さを積算したもので、暖房消費エネルギー量と相関すると言われている。冬の気温上昇を反映して、各地で暖房デグリーダーは急速に減少している
(資料:気象庁の気象データを基に筆者が分析)



併せて、1日の最低気温が0°C以下となる「冬日」も、各地で年30~60日減と大幅に減少図6。特に東京では、かつて年に2ヵ月程度あった冬日がほぼゼロに。最近は屋外で水が凍らないという実感は、気象データ上でも裏付けられている。

図6 日最低気温0°C以下の「冬日」も急減少

日最低気温が0°C以下になる「冬日」(気象庁の定義)は、各地で30~60日も減少している。水がはらない日が増えている印象は間違っていたのだ(資料:気象庁の気象データを基に筆者が分析)



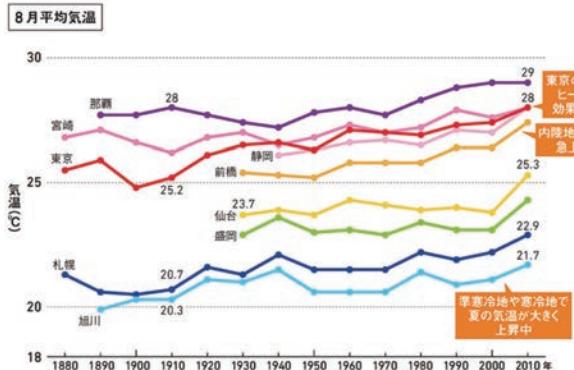
■ 夏の暑さは危険レベルに突入

冬の寒さが和らぐ一方で、夏の暑さは厳しさを増している。8月の平均

気温を見てみると、東京ではヒートアイランド効果もあって3°Cも上昇図7。岸部でも30日に達している。夜寝るときも冷房は欠かせない時代に入っているのだ。

図7 夏の平均気温も上昇中

8月の平均気温の推移（各都市の10年間の平均値）。夏の気温は東京など都市部や前橋などの内陸地で急激に上昇し、28°Cに達している。準寒冷地や寒冷地でも近年の温度上昇が急激である（資料：気象庁の気象データを基に筆者が分析）



最高気温が30°C以上の「真夏日」も大幅に増加し、温暖地では年間60日間と、2ヵ月間相当が真夏日だった図8。最高気温が35°Cを超える「猛暑日」も、前橋などの内陸地で特に増えている図9。消防庁の統計でも、熱中症の患者数が2010年以降に急増しており、昼間の暑さは看過できない「危険」なレベルに達していることが分かる。

図8 30°Cオーバーの「真夏日」が夏の間ずっと続く

日最高気温が30°Cを超える真夏日（気象庁定義）の日数の推移（各都市の10年間の平均値）。蒸暑地の那覇で真夏日が100日を超えるのは別格としても、東京などの温暖地でかつて30日だった真夏日が約60日まで長期化していることが分かる。仙台でも真夏日が30日超、北海道でも10日以上となっている（資料：下も気象庁の気象データを基に筆者が分析）

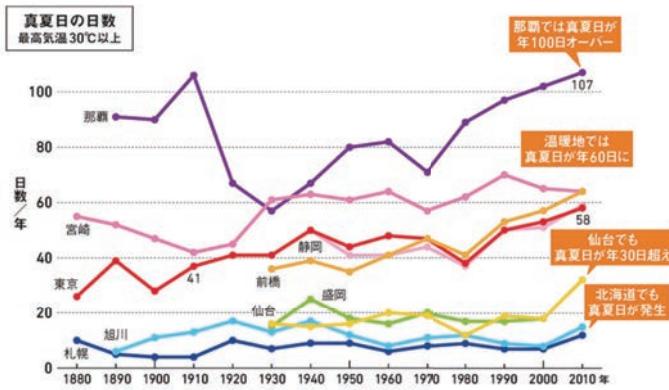
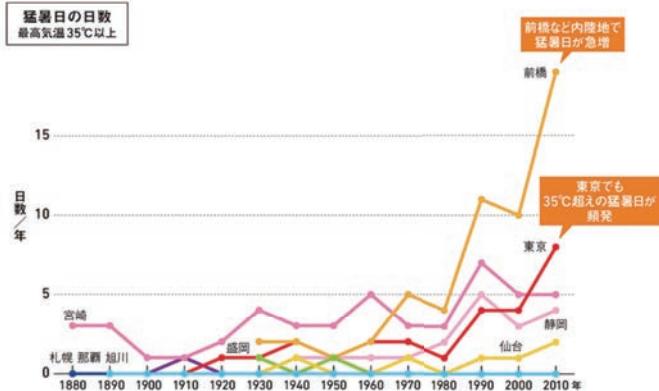


図9 35°Cオーバーの「猛暑日」が急増

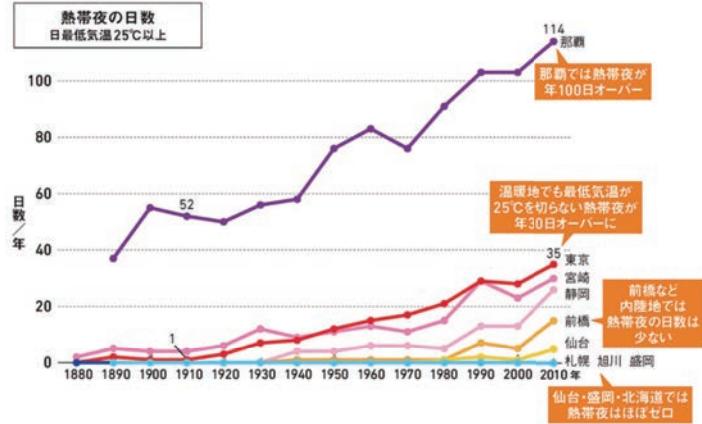
日最高気温が35°Cを超える猛暑日（気象庁定義）の日数の推移（各都市の10年間の平均値）。以前はめったに発生しなかった猛暑日だが、近年では内陸地や都市部で頻繁にみられるようになってきている。初夏に急に訪れる猛暑日では、熱中症への警戒が特に重要になる



夏の暑さは日中だけではない。最低気温が25°Cを下回らない「熱帯夜」も急増図10。年間100日オーバーの那覇は別格としても、都市部や沿

図10 夜も25°Cオーバーの「熱帯夜」が長期化し夜の冷房も必須に

日最低気温が25°Cを切らない熱帯夜（気象庁定義）の日数の推移（各都市の10年間の平均値）。東京や宮崎、静岡など、都市部・沿岸部では30日を超えていていることが分かる

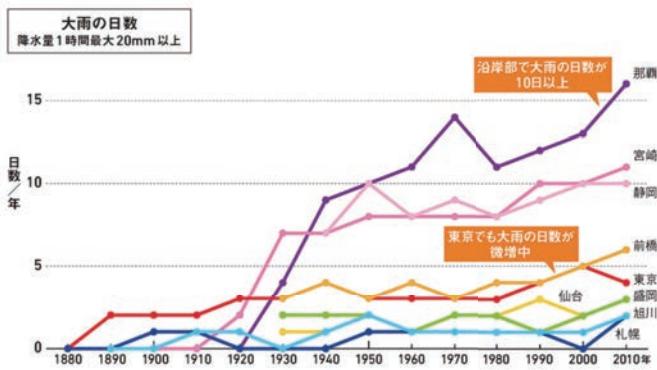


■ 暑さと風水害への備えを忘れずに

気温の変化と連動し、昨今の自然災害の激化も心配になる。降水量が1時間最大20mm以上の大雨があった日数を見てみると、やはり徐々に増えている傾向がうかがえる図11。地球温暖化が台風の発生に及ぼす影響については、まだ研究途中のようであるが、風水害の激化への備えは今後欠かせないだろう。

図11 大雨の日も増えている

1時間当たりの降水量が20mmを超える大雨の日数の推移（各都市の10年間の平均値）。大雨も増加傾向にあることが分かる。今後、温暖化によって台風の増加も予想されることから、大雨や強風に強い家づくりが大事な時代になってきている（資料：気象庁の気象データを基に筆者が分析）



IPCCの第5次報告書には、地球温暖化がこのまま進めば、2100年には夏の最高気温が全国で40°Cオーバーと破滅的な未来が訪れるという、環境省の予測も記されている。

残念ながら既に、地球温暖化は紛れもなく「リアル」な脅威である。温暖化の抑制に最大限努めるとともに、一方で激化への備えが欠かせない厳しい時代に入っているのだ。地球の住民全員がこの事実を真摯に受け止め、直ちに行動する必要に迫られている。

地球温暖化は、私たちの暮らしに直結する、待ったなしの課題です。この現実に対し、ヴァルトが提案するのは「少ないエネルギーで、一年を通して快適に暮らせる家」。それは、ご家族の健康を守り、日々の光熱費も抑えることにも繋がる、未来への賢い選択だと考えています。

国の新しい省エネ基準（等級4）がスタートしましたが、私たちはその先を見据え、より高性能な「等級6」を標準仕様としています。

これから家のづくりは、デザインや間取りと同じくらい「性能」が大切です。ご家族の未来のために、本当に価値ある住まいを、私たちと一緒に考えてみませんか。